

国内事例
in Japan

2

産廃処理から社会を変える／ 株式会社ナカダイ

1937年創業の産業廃棄物処分事業者、株式会社ナカダイ。2011年、廃棄物由来の素材を展示・販売し、廃棄物に新たな価値を生み出す拠点「モノ：ファクトリー」を創設した。

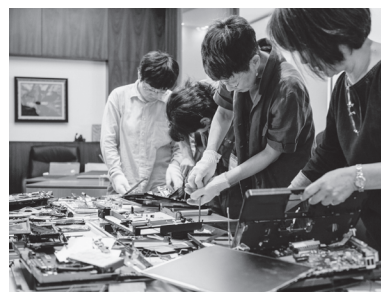
廃棄物を「ごみ」ではなく「素材」として活かす

年間2400人ほどが訪れるモノ：ファクトリーは、まるで美術館のようだ。元々は廃棄物だったLANケーブルや大きな信号機など、400種類にも及ぶ色鮮やかな素材と、その素材から生まれたプロダクトが展示されている。使われなくなったソーラーパネルを使用したテーブルや、小学校で廃棄された跳び箱でできた椅子など、どれもユニークでハイセンスだ。またここでは、解体／創作ワークショップや工場見学を開催し、廃棄物に対する理解を深めるのと同時に、モノと人あるいはモノと環境の関係を考えるきっかけづくりを行

っている。

モノ：ファクトリー創設のきっかけになったのは、ある疑問だった。「自社の売上を考えたら、廃棄物は増えた方がいい。しかし廃棄物のプロである私たちこそが、廃棄物の削減に取り組むべきではないか？」そこで考案したのが、いったんは捨てられたモノを集め分別・解体を行い、加工を施すなどして有用な「素材」に再生産する「リマーケティングビジネス」だ。

例えば、古くなって捨てられた椅子は、従来ならその時点で廃棄物となる。もし古くても欲しい人がいればリユースとなるが、それが難しければ解体して鉄のフレームをマテリアルリサイクル、もしくは再資源化できないウレタン等を熱源利用するサーマルリサイクルというのが一般的な流れだった。しかしモノ：ファクトリーでは、廃棄物を「素材」と捉える。椅子のフレームを組み合わ



モノ：ファクトリーで実施している解体ワークショップでは、工場に集まる多様なモノを自分で実際に解体し、廃棄物について考える場となっている

せたアート作品や、座面を自動車のエアバッグの生地で張り変えた新たな椅子に生まれ変わらせている。

これからのモノの廃棄の在り方とは

世界中から廃プラスチックを輸入していた中国が、受け入れを全面的に禁止したのは象徴的な出来事だろう。大量に中国へ輸出していた日本は、国内でリサイクル含む適正処理をするという当たり前のことをしなくてはならなかった。この社会的背景からも、製品を作ったら、作った製品を自社の責任で回収・処理する仕組み、また廃棄物をその後も使うことを前提とした仕組みの構築が必要になるという。そのために、例えば、廃棄物の量、素材、商品の特徴など「捨てる情報」を企業が予め開示することで、使いたい人に繋ぐことができる、とナカダイの代表取締役、中台澄之氏は語る。

モノが循環する社会の構築へと挑戦を続ける、ナカダイへの期待は高まる。

【聞き手：つな環編集部】



カギ、アンテナ、麻袋、学校の机、信号機など、廃棄物から生まれた素材を並べたマテリアルライブラリー